

論文の内容の要約

氏名	河村幸子
学位の種類	博士 (農学)
学府又は研究科・専攻	連合農学研究科 農林共生社会科学 専攻
指導を受けた大学	東京農工大学
学位論文名	動物とふれあう環境教育の意義に関する研究 —動物園と学校における幼少期の実践を事例に—

【論文の内容の要約】

本研究は、動物園と保育園を含む学校における幼少期の子どもとの「ふれあい」活動の現状と重要性を明らかにしたものである。

考察の素材を提供する事例として恩賜上野動物園と、公立小学校と保育園を取り上げ、動物園における「ふれあい」の環境教育と、地域ボランティアが支える学校飼育動物との「ふれあい」の教育的意義を明らかにすることが目的である。

動物福祉の面から今後はふれない「ふれあい」活動へと変化していくことが示唆された。しかし、幼少期の子どもには、五感で感じる直接体験が重要であることから、発達段階に応じた「ふれあい」活動の意義を提起した。

本研究では、幼少期の子どもが動物との直接体験をする場合、動物福祉を考慮し、モルモットのような家畜を用いるだけでなく、人との「ふれあい」を楽しむハズバンドリートレーニングを受けた動物であることの必要を述べている。人と動物が共生していくためには、野生動物や家畜、動物園動物という動物それぞれの種や個体に合わせ、人の発達段階に応じた「ふれあい」活動の手法をとることにより、動物と環境への理解が深まり、環境保全意識をもった主体が形成されることを提起している。

第1章では、幼少期における動物園と学校教育の場での動物とのふれあい活動の現状を見て、環境教育としてのふれあい活動の意義を明らかにした。動物園では今まで、幼少期のふれあい活動の必要性を認めながらも、学術的な研究が少なかったために、ただふれる、餌を与えるというふれあいの仕方をする園が多くあった。動物福祉に着目した、目的に合わせた活動は多くの動物園では見ることができなかった。そこには日本人の動物に対する「可愛がる対象」としての意識の積み重ねがあることが示唆された。動物にも感情があり、不必要な不快感や痛みから保護することの重要性が叫ばれたのは2010年頃以降であった。各動物園は飼育、展示の方法を見直すことに力が注がれた。幼少期の動物福祉に留意した動物園環境教育プログラムについては、一部の研究者によって続けられてはいたが、広く意識されたのはCOVID-19以降である。

「ふれあい」活動の目的を達成するためには、大人の役割が重要であり、関わり方も様々な工夫が取り入れられる。ふれることのない「ふれあい」という「ふれあい」活動の概念の拡大である。動物の気持ちを想像することに重点を置くことにより、「ふれあい」活動の目的は達成される。その時の大人の役割が大切であり、幼少期の自然科学的なものの見方の基本を身に付ける重要な鍵となる。広く市民の動物に対する学びが必要であり、動物園はその役を担うことができる。

学校教育では年々動物飼育から手を引きつつある現状が見えた。COVID-19、教師の働き方改革の長時間労働削減などの理由から、学校飼育動物は減少し続けている。学生の学ぶ教職課程の中に動物飼育の意義や方法についての内容が含まれていなかったことも明らかになった。教員や保育者は多くの動物の生態や飼育方法を学んだ経験がほとんどなかった。動物の気持ちを考える意識は児童・生徒の気持ちを考えることに繋がり、「いのち」の大切さや親子の愛情に気づかされることとなる。

動物を介在した環境教育は、動物園のような社会教育の機関と学校教育施設の両面から実践されることにより、あらゆる年齢層の人びとに「動物との共生」を考える場を提供し、保全のための行動化につなげる可能性が大きい。そのための教育の重要時期が幼少期にあるといえるであろう。

第2章では、幼少期の学校教育の場における生き物とのふれあいの歴史と現状をみてきた。学校現場は動物を飼育することから離れている学校が多いことが明らかになった。学習指導要領や指導資料では、幼稚園や学校という全ての児童が学ぶ場における動物介在教育の重要性が明記されながら、教育実践に活かさない理由は何か、そこにある問題を明らかにした。20年前のデータと比較し、家庭での動物飼育が減少していること、子どもを取り巻く社会状況の変化が、動物介在教育にも影響していることがわかった。しかし、そんな中でも学校、地域、自治体、獣医師の協力と教員の熱意により、動物介在教育が進められていることも明らかになった。幼少期の動物との「ふれあい」活動は非常に重要なものであり、地域ボランティアなどを組織し、地域力で学校教育を支えることの重要性を明らかにした。学校を中心とした協力体制をつくり、課題を克服していく中で、児童も大人も学びの機会を得、まちづくりへと広がる可能性が示唆された。

第3章では、恩賜上野動物園子ども動物園での湿地教育における「ふれあい」における動物園環境教育の内容と課題を見出した。

動物園では動物福祉に重点化したふれあい活動を目指している。ふれあい活動の内容は幅広く、多様な形でふれあうことのできる動物を用意することができる。ただ、幼少期の幼児・児童にとっては直接ふれることのできる動物を用意し、直接見る、ふれる、感じる体験を用意することが望まれることが明らかになった。大都会の動物園で、自然の不忍池を題材として、実際にはふれることのできない生物を観察し、幼少期の児童と大学生の学び、大人の学びに焦点を当て、動物園湿地教育のふれあいによる環境教育の可能性を明らかにした。児童と保護者、大学生が感動を共感し、心を通わせた環境教育から、

「ふれあい」活動の意義と有効性が確認され、可能性が広げられた。

第4章では、COVID-19の影響によって動物園が人獣共通感染症にどのように対応したのか、調査した結果をまとめた。動物園は展示動物と来園者、そして、飼育者の命を守ることに力点を置いていた。COVID-19の影響により、各園の個性もはっきりと現れたといえる。休園期間や対応策もそれぞれの園の事情が現れていた。感染者数の変動、地域差、飼育動物の特徴、来園者層を考慮し、判断されたと考えられる。再開園後も「ふれあい」活動が動物園から消えた期間であった。

COVID-19の影響によって、大きな変化を遂げたのがオンライン教育の普及である。一部の地域ではCOVID-19以前から進められていたが、全国一斉にほとんどの動物園で、SNSの利用が始められた。しかしながら、幼少期の児童にとっては、自分の身体で感じる、体感することの重要性が改めて確認された。動物園は、SNSを使って広報活動や、教育活動を進めながらも、やはり実物を自分の目で見ることの大切さを伝えている。

幼少期の子どもが動物と「ふれあう」ことの意義を、動物園と学校の実践から、改めて文献調査、インターネット調査、聞き取り調査、関与観察などを通して、明らかにしたものである。